

11月5日（土曜日）のエクスカージョンについて

林 和生・福島 義和

あいにく小雨が降ったりやんだりの悪天候のなかでエクスカージョンが行われ、足元が悪いなかを長い距離を歩いたため疲れた方が多かったようだ。

東亜飯店のロビーに集合の上、南京東路を歩いて人民広場駅から地下鉄2号線に乗車する。終点の中山公園駅で高架鉄道の3号線に乗り換え、虹橋路駅で下車した。

鉄道のガード下にある停留所から748路の公共バスに乗り、上海で最も古く開発され日本国総領事館もある「虹橋開発区」、「上海動物園」を経て、七宝鎮新龍路で下車した。

停留所前にあるショッピングセンター「七宝商城」の周囲を見て周り、また雨が降ってきたので傘を買ったりした。このあたりは、10年前までは落ち着いた農村であったが、蘇州の万科房産が開発した大規模な集合住宅群「万科城市花園」をきっかけに都市化が急速に進んでいる地区である。万科房産のほか、陽光集団など多くのデベロッパーも開発に着手し、郊外の大規模集合住宅地区が誕生した。現在、地下鉄9号線の工事が進められ、開通すると「七宝鎮駅」から市内中心部への利便性が飛躍的に高まるので、さらなる都市的発展が期待されている。

小雨の中を徒歩で「閔行区七宝農副産品交易市場」に向かった。ここは卸売りと小売りを兼ねた上海市内でも規模が大きい生鮮食料品を扱う農貿市場（菜場）で、商品は種類ごとに決められた区画で販売されている。雨天のうえ土曜日だったので、買い物客はまばらであった。

広い市場の中を約45分自由行動で見学してまわった。上海でも大小様々なスーパーが立地して市民の買い物行動は大きく変化しているが、生鮮食料品に関しては鮮度や品揃えがよく、価格も安い農貿市場で多くの人が購入している。

次に向かったのは、上海から最も気軽に江南水郷鎮の雰囲気味わえる「七宝古鎮」である。ここは2000年秋に七宝鎮政府が水路を挟んで南北に走る大街を軸に、清代の水郷鎮の街並みを再現したものである。もともと明代中葉に周囲の農村の綿織物の集散の中心地として発達した商業鎮で、水上交通にも恵まれ清代には全国から客商（遠距離商人）が綿布を仕入れに訪れ繁栄していた。

鎮内を散策する前に「七宝老飯店」で上海料理の昼食を楽しんだ。食事後に30分ほど自由に鎮内を散策して、様々な小吃（おやつ）や点心を試したりした。ここで上海社会科学院を訪問するメンバーは、別れて東亜飯店に準備にもどった。

残ったメンバーは七宝鎮のバス停から二階建ての92路のバスに乗って上海体育館に向かった。二階建てバスは眺めはよいものの、重心が高くて不安定で横倒しになる事故が多発したの

で近く全て廃車にすることが決められた。乗り心地はよくなく、ずっと乗っていると疲れてしまうバスだった。

上海体育館から軽紡績市場内を抜けて漕溪路駅から高架鉄道3号線で東宝興路駅まで乗ったが、そろそろメンバー疲れがピークになってきて口数も少なくなり、また夕暮れが迫り辺りは暗くなってきた。下車後、伝統的庶民の暮らしが残る東横浜路を通って、租界時代の建物が修復されレストランやカフェ、骨董品店などに利用される多倫路文化名人街を少し散策し「老電影咖啡館 (OLD FILM CAFE)」で休憩した。この辺りは第二次大戦前に魯迅、郭沫若、茅盾、葉聖陶、柔石など多くの文化人が活動していた地区で、市政府が当時の面影をできるだけ残して修復再建して多倫路文化名人街と名づけた。

辺りはすでに夕暮れで、旧知恩院だった建物、旧海軍陸戦隊本部だった建物などを眺めた後に、タクシーで東亜飯店にもどった。

夕食は南京東路にある上海風の北京料理店「燕雲樓」で上海風北京ダックなどを食べた。